孤独な首長の病

"The sickness of Lone Chief"

翻訳：森田司

この物語は私が 2 人の老人から教えてもらったものだ。私たちは虫よけの煙が漂う真夜中の涼しい時間に座っていた。話を聞いている間ずっと、煙をものともせずに私たちの肌で小腹を満たそうとする虫を潰そうと、狙いを定めて思い切り叩いていた。右側では、ぼろぼろ崩れている土手から 20 フィート下ったところに、ユーコン川がゴボゴボと気だるげに音を立てた。左側では、バラの葉で縁取られた低地の丘の上に太陽が眠たげにくすぶっている。その太陽はその晩眠っておらず、あくる幾夜も眠ることを許されない。

私と一緒に座っている勇ましく蚊を殺す老人たちは孤独な首長とムツァク、まだろくに歩けない頃からの仲で、現在は伝承と過去の出来事の知識を蓄えた老輩である。2 人は彼らの世代の最後の生き残りで、採掘の文化に縁のない後世の者たちに尊敬の念を抱かれることはない。「ブラック・ボトル[1]で精霊を呼び出せ、そのブラック・ボトルは愛想の良い白人のために数時間汗を流してやるか、みすぼらしい毛皮を与えてやれば得ることができる。こんな時代に一体だれが伝統などを重んじる？現代の驚異、蒸気船が、あらゆる法則に逆らって煙を吐き、騒音を鳴らしてユーコン川を行ったり来たりる時代に、恐ろしい儀式や仮面をかぶったシャーマニズムの神秘に、一体どんな力がある？そして、最も多くの木を切り倒し、迷路のような島々を巡って最も巧みに外輪船を操縦する男が、仲間から 1 番の尊敬を受ける時代に、伝統的な威光などに一体どんな価値がある？」

事実、あまりにも長く生きたせいで 2 人の老人、孤独な首長とムツァクは邪悪な時代に足を踏み入れてしまった。新しい秩序の中に、2 人の尊厳と居場所はない。そのため、することもなくただ死を待ち、蚊よけの煙の苦痛を分かち合い、蒸気船が来る以前の昔語りに進んで耳を傾ける奇妙な白人の男にその間ずっと親近感を覚えていた。

「こうして、1 人の娘が私に選ばれたのだ―」孤独な首長が言った。甲高い声は、折々、しわがれたガラガラの低音に急降下し、それに慣れると、か細く震える声に急上昇するので、まるでコオロギとウシガエルが互い違いに鳴いているかのようだった。

「こうして 1 人の娘が私に選ばれたのだ。私の父カスク・タ・カ、これはカワウソという意味だが、私が女を欲しがらないことに怒っていた。彼は年老いた、部族の長だった。私はその息子の最後の生き残りで、私が伝えなければ、後に生まれてくる者と、まだ生まれ

---

[1] スコッチ・ウイスキーの品名

ぬ者に、その血が受け継がれることはなかった。しかし、おお白人よ。私はひどく病んでいたのだ。狩りにも釣りにも喜びを見出せず、肉を食べても腹は温もらないなかで、一体どうして女を受け入れられよう？どうして婚礼の宴会の準備ができよう？どうして幼い子供のつたない言葉や騒動に期待ができよう？」彼は言った。

ムツァクが割り込んだ。「ああ、孤独な首長は大熊に捕まりながらも、頭が割れ、耳から血が流れるまで戦ったではないか。」

孤独な首長は力強く頷いた。「ムツァクの言っていることは正しい。時が過ぎ、私の頭はよくなっていたが、悪くもなっていた。身体が癒え、痛みは引いても、私の内側は病んでいた。歩けば足が震え、光を見れば目は涙であふれた。目を開けば景色がぐるぐると回り、目を閉じれば今まで見てきたもの全てが頭の中でぐるぐる回った。そして、目の上はひどく痛み、まるで重たいものが私の上に常にのしかかっているか、あるいは苦痛を与える帯がきつく締められているようだった。それから、言葉が遅れるようになり、適当な言葉を口に出せるまでに時間がかかるようになった。それほど時間が経たぬうちに、あらゆる言い方が犇めき、私は間抜けな口をきいてしまう。父のカワウソはカザーンという娘を私のもとへ連れてきたとき、私はひどく病んでいたのだ。」

ムツァクが割って入った。「若く強かな娘で、私の姉の子供だった。子供たちのために力強い足取りで駆け回ったのがカザーンで、まっすぐな足をしていてとても素早かった。他のどんな娘よりも良いモカシンを作り、樹皮で結わいた縄は最も頑丈だった。目と唇に笑みを蓄え、急いた気性でもなければ、男が出した命令に常に従うような思慮の無い女でもなかった。」

孤独な首長が続けた。「私が言った通り、私はひどく病んでいた。そして、父カワウソはカザーンという娘を私のもとへ連れてきた。私は婚礼の支度よりも、葬儀の支度を私にさせるべきだと言った。すると、父は怒りで険しくさせ、望み通りに私は埋葬されると言い、そうしてまだ生きている私は、すでに死んだ者として支度させられることとなったのだ。」

「これは我々部族のやり方ではないのだよ、おお白人よ。孤独な首長に為されたこれらのことは、我々の慣習では死人にのみ行われることなのだ。カワウソの怒りがあまりに大きかったのだ。」

孤独な首長が言った。「ああ、私の父カワウソは言葉数が少なく行動の早い男だった。私が横たわっている小屋の前に集まるよう民に命令した。集まった人々に、死んだ息子を弔

うように命令した。」

「そして、彼らは小屋の前で死の唄を唄った。オ・オ・オ・オ・オ・オ・アハー・ハ・ア・イク・クル・クク・イク・クル・クク…。」あまりに素晴らしくムツァクが唄を真似たので、私の背骨が端から端まで蔓のように伸び、共鳴に弧を描いた。

孤独な首長が続けた。「小屋の中では、煤で顔を黒くした母が、私の頭の上に灰を撒き、すでに死んだ私を弔った。私の父が命令した通りに。そうして、私の母オキアクタは大きな叫び声で私を弔い、自らの胸を叩き、髪を引き裂いた。私の姉のフーニャクと母の姉のシーナタも同じようにし、2 人の声で激しい痛みを覚えた私は、確実な目前に迫る死を実感した。

「花嫁の一族の長老たちが私の横たわる小屋に集まり、私の魂の旅路を議論しだした。あるものは亡霊が叫びさまよう深く果てしない森について、そこで私も終わりなくさまようだろうと語った。またある者は悪霊が髪を掴んで人を引きずり込まんと腕を伸ばす、汚水が激しく流れる川について語った。その川へ行くためのカヌーが私に用意されるだろうと皆が口をそろえていった。さらに他のものは、生きた人間が見たこともないような嵐について、その嵐の時、星が降りそそぎ、大地が割れてたくさんの大きな口を開け、地球の流れ全てが噴出し引き戻るだろうと語った。そのとき、私のそばに座る者たちが腕を振り上げ、声を大きく叫ぶと、それを聞いた小屋の外の者たちが一層大きな声で叫んだ。私は一体、いつ、どこで、どうして死んだのか分からなかったが、しかし確実に死んだのだということが分かった。」

「それから、母オキアクタは、横たわる私の横にリス皮のパーカを置いた。それから、私の魂が道中濡れて凍えてしまわないように、トナカイの毛皮のパーカとアザラシの胃で作ったレインコート、雨用のマクラク[2]も置いた。さらに、ツツジとハリブキで深く覆われた急勾配の丘についての話題になると、道中私の足を守るために母は厚手のモカシンを取ってきた。

「長老たちが、私が退治しなければならない巨大な獣について語ると、若者たちが私の持つ中で最も強力な弓と最もまっすぐな矢に、投げ棒、槍とナイフを私の横に置いた。そして、私の魂がさまよう暗く静かな巨大な空間について話題になると、母は一層大きな声で叫び、一層多くの灰を私の頭の上に撒いた。」

---

[2]原文では muclucs(通常は mukluks と表記)で、トナカイやアザラシの革を素材にしたイヌイットの長靴のこと

「あの娘カザーンが及び腰でこっそり入ってきて、私の旅の道具の上に小さなかばんを置いた。その小さなかばんの中には、私の魂が必要になる火を起こすための火打石と鋼、それからよく乾かされた火口が入っていることが分かった。それから、私を包むための毛布が選ばれた。私の魂と連れ立つために殺される奴隷も選ばれた。私の父は裕福な権力者だったので、その息子である私を埋葬するのに奴隷が７人つくことは似つかわしいことだった。奴隷たちはかつてユーコン川の下流に住むムクムク族との戦いで獲得した者たちだ。そのあくる日、私の魂と共に未知の世界を探索するために、シャーマンのスコルカが１人ずつ奴隷たちを殺すことになっていた。汚水が激しく流れる大きな川まで、奴隷たちは旅の道具と一緒にカヌーを運ぶ。彼らの役目はそこで終わり、そこに彼らの居場所はない。彼らにはその先はなく、暗く果てのない森に永遠にとどまり呻き続けるのだ。」

「そうして、私の暖かい衣服や毛布に戦のための武器見てみると、そしてこれから殺される７人の奴隷たちのことを思うと、自分の葬儀が誇らしく思え、自分はたくさんの男から妬まれて当然なのだと実感した。その間ずっと私の父カワウソは黙って顔を険しくさせて座っていた。あたかも私が千回の確実な死を遂げたかのようになるまで、人々は昼夜を分かたず私のための死の唄を唄い、太鼓を叩いた。」

「しかし、朝になり、起きた父は話し出した。彼は民が知っての通り生涯ずっと戦に身を投じてきた男だったと言った。また、焚火のそばで柔らかい肌の上で死ぬよりも、戦いの中で死ぬことの方がずっと名誉であることも民は分かっていた。そして、いずれにせよ私が死ぬことは決まっていたので、ムクムク族に立ち向かい、殺されてしまうのが結構なことだった。そうなれば、最後の死に場所で私は名誉と首長の地位を得ることができ、そうすることで父の名誉が守られる。それ故、カワウソは戦闘部隊に川を下る準備するように命をくだしたのだ。そして、我々がムクムク族に出くわした時に、戦うふりをし、そして殺されるために私は舞台を離れて１人で先へ進むこととなった。」

自分を抑えきれなくなったムツァクが叫んだ。「いや、聞くのだ、白人よ！シャーマンのスコルカはあの晩、カワウソに長々と耳打ちした。孤独な首長が死ぬように彼を前線に送ったのは、彼の行いだったのだ。カワウソは年を取り、孤独な首長が最後の息子であったので、スコルカは腹の内では首長となり民を支配しようとしていたのだ。そのため、人々が昼にも夜にも大声を上げているにもかかわらず、孤独な首長が未だ生きていることに、彼が死なないのではないかいう危機感をスコルカが抱いたのだ。そうして、スコルカの助言が、カワウソの口から、名誉と実績に十分な言葉となって、告げられたのだ。」

孤独な首長が応じた。「ああ、これがスコルカの行いであると私は気が付いていたが、ひ

どく病んでいたので思慮がなかったのだ。私には怒るための感情がなく、勇敢な言葉を発するための腹がなく、どちらにせよ関心もなかった。私は死ぬことだけを気にかけ、そのためだけに行動した。おお白人よ、こうして部隊の準備が整った。経験のある戦士はおらず、器用で賢い年長者もおらず、老獪さも賢明さもない、小競り合いを見たことがあるに過ぎない 100 人の若者たちがいるだけだった。そして村中のものが川の土手に集まり我々の出発を見送った。我々は大きな喜びとともに私への賛美を唄いながら出発した。おお、白人よ、一人の若者がバクルへの前進しているのを目にするにもかかわらず、その者が死を運命づけられているにもかかわらず、喜んでいるのだ。」

「そうして、100 人の若者と、同じく若く経験のなかったムツァクも一緒に前進した。そして、私の父カワウソの命令により、ムツァクのカヌーとカンナクトのカヌーによって私のカヌーは左右から急かされた。櫂を動かし生き延びることができたのは、私自身の力によるものであり、そのために、最後には病気にかかわらず勇気を示すができた。それから、我々は川を下った。」

「退屈にはならないさ、この旅の話はそう長くないのだから。それから、ムクムクの村からそう遠くない上方で 2 人の戦士がそれぞれカヌーを漕いでいるところに出くわし、我々を目にした連中は逃げ出した。そのとき、父の命令通りに私のカヌーが解き放たれ、私は独りで川の下方へながされた。さらに、命令通りに私の死を目撃し、その後報告に戻るために、若者たちも川を下った。このようにして、私の父カワウソとシャーマンのスコルカは、彼らに従わなかった場合に確実に罰が下せるようにしていたのだ。」

「私は櫂を水面に着けて、逃げていく戦士たちの背中に罵倒の言葉を浴びせた。私の放った下劣な言葉に、戦士たちは怒り振り向いた。連中が戸惑っている若者たちを凝視しているうちに、私は一人で向かっていった。その者たちが引きながら安全な距離を保たせたうえで、2 人はある程度分離し、私が来るのを両側から待っていた。そして、手に槍を持ち、我々の部族の戦の唄を唄いながら私が間に入って行った。2 人は槍を投げつけてきたが、私は体を屈め、槍は体の上で空を切り、私は傷を負わなかった。そのとき、我々3 人は一体となり、私は右の者に槍を投げ、その槍は喉を貫き、そして背中から水に落ちた。

「その時に大きかったのは、私が人を殺したという驚きだ。私は左の者に向き、死に直面するために櫂を力強く漕いだ。しかし、その者の二撃目は私の肩をかすめ、最後の攻撃となった。そして私は馬乗りになって、槍を放らず穂先を胸に突き立て、両手で押し込んだ。持てる力全てを注いで槍を押し込む間、その者は櫂の平らな部分で 1 度 2 度と私の頭を殴った。」

「槍の穂先が背中から突き出しても、その者は私の頭を殴った。閃光が、まぶしい光が走り、私の頭の中で何かがぺきりと折れた、そのような風にぺきりと音がしたのだ。そして、私の目の上にずっとのしかかっていた重みが引き、額にきつく結ばれた帯がちぎれた。そして、大きな喜びが訪れ、私の心は歓喜し唄った。」

「これが死なのだと、私はそう思った。そのため私には死が快く感じられた。それから、空になった 2 隻のカヌーが目に留まり、私が死んでおらず、それどころか回復したことを実感した。あの男の頭への殴打が私を回復させたのだ。私は殺されたことを実感し、血の味が私を獰猛にし、私は櫂をユーコン川の中流に突き立てた。ムクムク族の村へとカヌーを急進させた。若者たちは私の背後で大きな声で叫んだ。私は自分の肩を確認し、水面の彼らの櫂から白い泡が立つのを見た。」

ムツァクが言った。「ああ、われわれの櫂から白い泡が立ったとも。孤独な首長の死に様を、自分たちの目で見届けるというカワウソとスコルカの命令を守っていたのだから。ムクムク族の若者が鮭の罠へと向かう途中で、100 人の男たちを背後に孤独な首長がやって来るのを目撃していた。若者はカヌーでまっすぐ村へと逃げた。その警報が村に届けば準備がなされたであろう。だが、孤独な首長は急いで後を追い、我々もその死にざまを見るために急いで孤独な首長の後を追った。村を目前にして若者が川岸に飛び出すと、孤独な首長がカヌーの中で身を起こし、強烈な一投を放った。槍は若者の腰の上を貫き、その若者は顔から倒れた。」

それから、孤独な首長は棍棒を手に雄叫びを上げて土手に飛び移り、村へと突撃した。最初に出くわした男はムクムク族を支配する首長のイトウィリーで、孤独な首長はイトウィリーの頭を棍棒で殴り、死に絶え、地面に崩れた。そして恐怖の余り、孤独な首長の死にざまを見届けることができなかったかもしれなかった我々100 人の若者たちも川岸に飛び移り、孤独な首長を追って村へと入った。事情が分かっていないのはムクムク族だけで、我々が戦いに来たのだと思い込み、そのため、弓の革紐が音を立て、矢が風を切って我々の間に飛んできた。そこで我々は任務を忘れて槍と棍棒を手にそのムクムク族に馬乗りになった。ムクムク族には準備がなかったので、すさまじい虐殺となった。」

古い時代の記録を宿す作品となった萎れた顔で孤独な首長が高らかに言った。「私は自分の手で奴らのシャーマンを殺した。私の手で殺した男は、我々のシャーマンであるスコルカよりも優れたシャーマンだった。そして私が男と出くわすたびに、『死神がやってきて、私が男を殺すたび、死神が遠ざかる。』のだと思った。命の息吹が力強く鼻孔に宿り、私は不死身になったかのようだった。」

ムツァクが続けた。「我々は再び、村中、孤独な首長の後を追った。我々はこれ以上戦えるムクムク族がいなくなるまで、あちこちを狼の群れのように前後から追った。その後、我々は 100 人もの人間を集めた—奴隷とその倍の数の女、そして数えきれないほどの子供だ—そして、すべての家と小屋に火を放って村を出た。そしてそれがムクムク族の最後だった。」

孤独な首長が大得意で繰り返した。「そしてそれがムクムク族の最後だった。我々が自分たちの村に戻ったとき、民は持ち帰った財と奴隷の数に驚き、そして私が生きていることに驚いた。私の父カワウソが、私の為したことに喜び身を震わせた。彼は老いていて、私がその年寄りにとって最後の息子だったからだ。それからすべての熟練の戦士たちと、老獪で賢明な者たちがやってきて、すべての民が一堂に会するに至った。そして私は立ち上がり、雷のような声でシャーマンのスコルカに、前に立つように命令した。」

興奮したムツァクがふいに叫んだ。「ああ、おお白人よ、雷のような声で、そのために民はひざを震わせ、恐怖したのだ。」

孤独な首長が続けた。「スコルカが私の前に立つと、私は死ぬつもりはないと言った。そして、墓の向こうにいる悪霊を失望させてはいけないとも言った。それゆえ、暗く果てのない森で永遠に呻くことになる未知の世界へ、スコルカの魂を向かわせるのがふさわしいことは疑いようもないと考えた。そして、すべての民の眼前で、でそこに立っているスコルカを見た。孤独な首長たるまさにこの私が、すべての民の眼前で、私自身の手でシャーマンのスコルカを殺した。不平の声が上がると、私は大きな声で叫んだ。」

「雷のような声で」スコルカが即座に言った。

「ああ、雷のような声で私は大きな声で叫んだのだ。『見よ、おお汝ら民よ！私は偽のシャーマンスコルカを殺した孤独な首長である！男たちの中から独りで死神の門をくぐり、そして帰ってきた。私はこの目で目に見えぬものを見てきた。私はこの耳で口に出されぬ言葉を聞いてきた。私はシャーマンのスコルカよりも偉大である。いかなるシャーマンよりも私は偉大である。おなじく、私は父カワウソよりも偉大な首長である。彼は生涯ムクムク族と戦い、そして見よ、私は 1 日で奴らを撃ち滅ぼした。一息で奴らを撃ち滅ぼした。私の父カワウソは老い、シャーマンのスコルカは死んだ。したがって私が首長となり、シャーマンとなる。これからは、私が汝らの首長でありシャーマンである、おお民よ。そして私の言葉に意を唱えるものがあれば、前へ出でよ！』

「私は待ったが、前に立つ者はいなかった。そして、私は叫んだ『おお、私は血を味わっ

た。さあ、肉を持ってこい、私は腹を空かせている。食糧庫をこじ開け、魚のあばら肉を割き、盛大な祝宴を上げるのだ。陽気に騒ぎ、葬式ではなく婚礼の唄をうたえ。そして最後に、あの娘、カザーンを連れてくるのだ。カザーンは孤独な首長の子の母となるのだ。』

「私の声を受け、老いた私の父カワウソは女のように泣き、私の膝に両手を置いた。そしてその日から私は、首長でもあり、シャーマンでもあった。栄光は私にあり、すべての人間はひざまずき服従した。」

「蒸気船がやって来るまでは」ムツァクが即座に言った。

「ああ、蒸気船がやって来るまでは。」孤独な首長が言った。